

演題1：自分らしさを支える支援 ～みんな一緒にマイペースナンバーワン～

社会福祉法人 訪問の家 朋

橘川 真樹（支援スタッフ）

はじめに

朋への通所を開始してから4年間の活動支援を振り返り、その時々に見せる姿をどのように受け止め、活動の進め方や環境、関わり方を考えてきた経過と、実践から得られた学びをまとめて報告する。

事例概要

2003年生まれ。四肢に麻痺があり、移動にはストレッチャータイプの車椅子を使用している。言葉でのやり取りは難しいが、視線や身体、口の動きなどで気持ちを表している。繊細で真面目な面があり、活動に一生懸命取り組む姿が見られる。気圧や疲れ、明暗の変化、精神的な緊張等により痙攣発作が起こることがあるため、体調や緊張の様子も確認しながら活動を進めている。

通所開始にあたり、家族からは「日々の活動の範囲や関わる人を広げたい」「若いうちにたくさんのことを経験してほしい」という思いが聞かれていた。一方、通所当初は慣れない環境の中で発作が頻回に起こり、強い痙攣後に発熱や呼吸抑制が見られることもあった。そのため、経験を増やすことだけを目的とせず、本人がどのような時に安心し、どのような時に緊張するのかを確認しながら活動を進めてきた。

1年目は「担当クッキーづくり」に取り組んだ。ミーティングから試作、味の決定まで約4か月をかけ、周囲の話に視線を向けたり、候補によって口元や身体を動かしたりする姿が見られた。話し合いが長くなった際には、口元の動きから「今日はここまでにしたい」と受け取る場面もあり、緊張から発作やお腹を壊すこともあった。最終的に3つの候補から「カプチーノ」を選んだ。

2年目の「成人を祝う会」では、自分が注目されることへの緊張を踏まえ、スピーチを事前にビデオ撮影し、控室に同じグループの仲間の写真を貼るなど、普段の雰囲気を感じられる環境を整えた。「みんな一緒に、マイペースナンバーワン！」をテーマに準備し、当日は落ち着いて会に参加した。

3年目のFANCL交流会では、事前に会場写真を見るなど、見通しを持てるよう準備を重ねた。「自分のことを伝えるクイズにしますか」と尋ねると、スタッフに視線を向け、腕に力を入れながら笑顔を見せた。当日は緊張する様子もあったが、発作なく参加することができた。

4年目の現在は、地域の学童へのクッキー納品で「窓口」を担当し、スタッフと一緒に味の紹介や受け渡しを行うなど、活動する場や関わる人が朋の外へと広がっている。

考察

4年間を振り返ると、本人が突然大きく変わったのではなく、その時々に見せる姿を手がかりに、本人に合った活動の進め方や環境、関わり方を考えてきた積み重ねがあった。緊張や立ち止まる姿も本人から示される大切なものとして受け止める中で、本人のペースを尊重することは、挑戦をしないことではないと考えるようになった。

家族には「若いうちにたくさんのことを経験してほしい」という思いがある一方、支援者として本人への負担を心配し、どこまで経験を広げてよいのか迷うこともあった。家族の思いと本人が見せる姿のどちらか一方を優先するのではなく、その双方を受け止めながら、「できる・できない」ではなく、「どうしたら本人が力を発揮できるのか」をその都度考えてきたことが、活動する場や関わる人の広がりにつながってきたのではないかと考える。

また、周囲の人の意見を聞いて考える、仲間の存在によって安心する、自分のことを相手に伝えようとするなど、他の利用者や家族、職員、地域の人との関わりによって、それまで見えていなかった本人の姿に気づくこともあった。

まとめ

「自分らしさを支える」とは、支援者が今見えている姿だけから「この人はこういう人」と本人らしさを決めつけることではないと考える。本人と同じ時間を過ごし、その時々に見せる姿を受け止めながら、本人に合った環境や関わり方を考えていく中で、本人らしさは見えてくるものではないだろうか。

また、自分らしさは本人の中だけにあるものではなく、人との関係の中で発揮され、新たに見えてくるものでもある。今見えている姿だけで本人の可能性を決めず、本人が誰と、どのような環境や関係の中にと力を発揮していけるのかを考え続けることが、「自分らしさを支える」ことにつながるのではないかと考える。

演題2：できた！があふれた2日間 ～ディズニーシー・水族館 1泊2日の大冒険～
神奈川県立こども医療センター 重症心身障害児施設 ひだまり
鈴木 慎（児童指導員）

はじめに

当施設では、年間行事として宿泊バスハイクを6月に、日帰りバスハイクを毎月1回実施している。当初、家族の事情などにより自宅への外泊が難しい利用児・者に宿泊の機会を提供したいという思いから始まり、現在では施設外での活動を通して生活の幅を広げ楽しい経験を積むことを目的としている。今回のバスハイクでは、様々な刺激や体験に触れることで、普段とは異なる環境の中でも笑顔や興味・関心が多く見られた。本報告では新たな一面や一人ひとりの成長を再認識する有意義な機会となったことを述べる。

参加者および行程

参加者：入所児4名（経口摂取2名、胃瘻注入2名）、
看護師3名、生活支援課3名、合計10名で実施。

行程：

1日目…ディズニーシー（以下TDS）、昼食、アトラクション、グリーティング、夕食

宿泊…ホテルシーサイド江戸川、入浴準備、入浴、着替え、排泄ケア、就寝、朝食

2日目…葛西臨海水族園、ふれあい体験、館内鑑賞、昼食、帰所

事前準備

宿泊バスハイクの実施にあたり。以下の準備を行った。

1. 家族への安全面での説明と同意取得
2. パークとの事前調整（アトラクション・食事場所・ルート確認）
3. 宿泊先の入浴支援等に関する看護師との連携及び情報共有
4. 吸引、褥瘡対策、緊急時対応など、想定できる事態への備え
5. また児童への音楽や動画などで事前周知と、期待向上

実践内容

1日目：TDS

アトラクションでは、サービス（DAS）の活用により待ち時間などの負担を軽減し、順番待ちによる児童の疲労や不安を最小限に抑えるよう配慮した。「ト

イ・ストーリー・マニア！」では初めてのライド体験に児童が振動や音、匂いなどの刺激に反応し、笑顔や驚きの表情を見せた。現地でしか味わえない体験が、児童の興味・関心を引き出すきっかけとなった。また、キャラクターグリーティングでは、直接触れ合うことで、普段は見せない凝視や手を伸ばす仕草が見られ、職員も新たな一面を発見する機会となった。
宿泊先：ホテルシーサイド江戸川

ホテルの入浴では、初めての大浴場を利用する児童もおり、広い湯船の中でゆったりと過ごすことができた。夜間は、職員が見守る中で安心して休むことができた。朝食では彩り豊かな食事を前に期待する様子が見られ、食事そのものを楽しんでいた。それぞれの児童の新たな反応や表情を見る機会となった。

2日目：葛西臨海水族園

水族園では、胃瘻注入やミキサー食の準備が安全に行えるよう体制を整えた上で鑑賞した。ウニやナマコなどのふれあい体験では、初めは戸惑う様子も見られた児童も、徐々に手を伸ばして触れようとする姿が見られた。また、水槽の光や魚の動きといった感覚刺激に対し、多様な反応や表情の変化が見られた。

考察

今回の宿泊バスハイクでは、TDS、葛西臨海水族園、ホテルでの宿泊体験を通して、日常生活では経験することの少ない刺激や体験に触れる機会を得ることができた。

その中で、普段は行事への参加が消極的であった児童が体験へと主体的に参加しようとする姿が見られたことから、非日常的な体験は児童の興味や関心を引き出し、自発的な行動を促す機会となったことが考えられる。

また、様々な感覚刺激や人との関わりを通して、多様な表情や行動の変化が見られたことは、社会参加の機会が児童の成長や自己表現を支える重要な役割を担っていることを示していると考ええる。

さらに、医療的ケアを必要とする児童であっても、事前準備や他職種連携を行うことで安全に宿泊を伴う行事へ参加できることが確認された。本実践では、児童の生活経験を広げるとともに、「できた」という成功体験を積み重ねる貴重な機会となったと考える。

演題3：水族館へ行こう！ ～本人の希望した外出と未来の支援に向けて～ 七沢療育園

竹石 昇悟（生活支援員） 丸山 大志（看護師）

はじめに

本報告では、意思決定支援に基づき、本人が希望した外出を計画し、どのようにして本人が行先を決めたのか、現地での様子や状態などを記録し発表する。また、昨年10月に行った外出と、本外出を比較し、本人の表情や様子等の変化についても考察していく。

実践内容

対象：Aさん30歳・男性

診断名：脳性まひ、てんかん、慢性呼吸不全、
気管支喘息 人工呼吸器を常時使用。

2021年1月に長期入所。

- ① 外出日：2025年10月8日、
目的地：服部牧場
外出計画方法：感染症対応による外出規制のなか、
職員が行先等を計画し外出。
- ② 外出日：2026年7月16日、
目的地：新江ノ島水族館
外出計画方法：規制緩和により、1日外出が可能
となる。
タブレットを使用して本人が強い
興味を示して選択し、外出。

結果と考察

新江ノ島水族館の映像を見たとき、目を映像にずっとむけており、笑顔になるように口角をあげていた。職員の質問に瞬きをすることで、返事をして行きたいという意味が表れていた。

外出先では周囲を見渡し、素早く泳いでいる魚や水槽に近づくペンギンなどには驚くように目を丸くし、館内スタッフとの会話やぬいぐるみなどに笑顔になるなど、表情の変化を多く見せており、どの場面においても何かしらの反応を示していた。

昨年に行った外出では全体的に表情に変化が見られなかったが、本外出では、Aさんの「驚き」「笑顔」、「集中」等、様々な表情の変化を見せており、「表情」のバリエーションの多さと「感情」の豊かさが明確にあることを改めて知ることができた。「行ってみたい」という好奇心からの影響によるところが大きいと感じる。

体調面に関しても、施設内での車いすの乗車回数を増やしたことへの体力向上だけでなく、本人自身の「意欲」が本外出を無事に行えたことに繋がったと考えられる。

今後の展望

本人の意思決定支援に基づく活動が本人の精神、身体にも良い影響を及ぼすことが本外出を通して実感した。今後も本人が豊かでより良い生活が送れるよう、個々の意思決定を重視し、支援の幅を広げていく。

演題 4：療養介護型施設で暮らす利用者の日中活動の在り方
横浜医療福祉センター港南
石垣 桂（生活支援員）

はじめに

療養介護型施設において、重度障害や医療的ケアを要する利用者の日中生活は、居住棟内での生活が中心となりやすく、刺激や役割、社会とのつながりの機会に限られる。その為日中活動室は、日常生活とは異なる環境で過ごす場を提供し、楽しみや期待感を生み出すとともに、生活の質(QOL)の向上に寄与する重要な支援の一つを担っている。当施設では、利用者一人ひとりの表現や反応を丁寧に捉えながら、日中活動の充実に取り組んできた。

目的

重度障害・医療的ケアのある利用者に対する日中活動の実践を通して、活動が利用者の覚醒状態や情緒、表情の変化に与える影響を明らかにし、療養介護型施設における日中活動の意義と在り方を検討することを目的とした。

方法

季節を感じる活動、五感への働きかけ、運動機能を活かした活動、趣味・嗜好を反映した活動などを計画・実施した。事前の準備や実施中の関わり方も工夫した。（参加者個別の情報共有、身体状況の把握、環境整備、刺激が伝わる内容、利用者が主役となる為の盛り上げ、表出の記録など）活動中は、表情、視線、体動、発声、モニター数値（酸素飽和度、脈拍、呼吸状態）を観察し、参加利用者に充実した時間を提供する為に、日常の関わりや記録、職員間での情報共有を通して利用者の気持ちや反応を総合的に評価した。

結果

活動に参加した利用者からは、日中活動室という日常空間とは異なる環境を理解し、継続的に参加する事で活動時に表情や反応の変化が見ることができた。傾眠傾向にあった利用者が活動中に開眼するなど、覚醒の向上も認められた。また、笑顔や驚き、注目、追視など活動内容に応じた豊かな表情表出が増加した。

考察

日中活動は、利用者にとって楽しみや期待感を生み出し、情緒の安定や覚醒の促進につながると考えられる。利用者のわずかな表情や体動、モニター数値を丁寧に読み取り、関わりを積み重ねることで、意思や好みを汲み取った活動提供が可能となる。活動を通して「注目される」「役割を持つ」「選択決定する」経験が、生活の質向上に寄与していると示唆された。

まとめ（結語）

療養介護型施設における日中活動は、重度障害・医療的ケアのある利用者の覚醒や情緒の安定を促進し、生活の質の向上に大きく寄与する。今後も利用者一人ひとりの希望や表現を大切にしながら、地域との繋がりを持ち、安定した活動提供と内容の充実を図っていく必要がある。障害の有無に関わらず、自身の生き方について意思を伝え、役割の中で選択出来ることが大切であり、そこに携わる者は、その思いを汲み取り、必要に応じて代弁していける支援が必要である。

演題5：特定技能外国人の記録力向上に向けた日本語研修および理解度テストの実施報告
～ADDIEモデルを参考にした教育設計～
重症児・者福祉医療施設 ソレイユ川崎
吉澤 政哉（生活支援課） 山村 俊（生活支援課）

はじめに

当施設では介護職員の人員不足への対応として、2023年より在留資格「特定技能」による外国人材の受け入れを開始し、現在12名を雇用している。入職後の教育は日本人職員と同様の方法を基本とし、平仮名併用表記や写真を用いた。その結果、三大介護は適切な介助を提供できる水準に達し、利用者・職員とのコミュニケーションにも大きな支障はみられなかった。

一方、電子カルテ上の活動記録には質の差がみられた。具体的に記載できる者がいる一方、単語の羅列にとどまり読み手の補足を要する記録もあり、記録に苦手意識を示す者もいた。経験に基づく育成や伝承的教育だけでなく、教育分野の知見を取り入れた計画的な人材育成が必要と考え、インストラクショナルデザイン研修を受講し、ADDIEモデルに基づく教育設計を学んだ。これを参考に「利用者に合った個別支援計画書を作成できること」を最終目標に設定し、達成に必要な力を階層分析した。その結果、モニタリング記録、毎月の経過記録、SOAP形式での活動記録、長期・短期目標の設定などが必要であり、基礎として「日本語を適切に使用し記録できる力」が不可欠と考えられた。本発表では、その実態把握のために実施した日本語研修および理解度テストについて報告する。

実施方法

研修は、2人1組で単語カードを用い、読み方と意味を出題し合うテスト形式で行った。研修・研修後のテストで使用した単語は、電子カルテの記録をテキストマイニングし、介護現場で使用する単語を中心に扱った。事後テストは、①単語の読みを書き意味を選択する問題、②文中の2択から適切な単語を選ぶ問題、③絵を見て様子を自分が表現できる範囲の日本語で記述する問題の3種類とした。実施中は否定的な言葉を用いず、緊張が和らぐ雰囲気づくりに配慮した。

結果・考察

開始時は緊張した表情がみられたが、単語カードでの出題を通じて笑顔がみられ、明るい雰囲気でも終了した。「次はいつ行うのか」と前向きな発言も聞かれた。使用頻度が高い単語から問題を作成したため、平均正答率は8割程度と予測していたが、平均正答率は6割程度と想定を下回った。単語を読む問題では、意味は理解できても漢字が読めないという返答が多かった。絵の記述問題では、読み取る内容や表現方法に個人差がみられた。

以上より、日常会話や基本的な介護動作は習得できていても、介護記録力を向上するうえでは、漢字の読解力、語彙力、状況を適切に表現する文章力に課題があることが明らかとなった。この課題を抽出できたのは、経験や伝承に基づく教育にとどまらず、インストラクショナルデザインおよびADDIEモデルに基づく教育設計を行ったためと考える。文化的背景や教育環境が異なる人材の育成では、指導者の経験だけに頼った教育では習得に個人差が生じやすい。定期的に研修と理解度テストを実施し、評価結果を次の設計へ反映させることが、全体のレベルアップと個人差の軽減につながると考える。

演題6：補装具製作について ～リハビリの関わり～
鎌倉療育医療センター 小さき花の園
中島 真文（理学療法士）

はじめに

重症心身障害児者（以下、重症児者）にとっての補装具は、単なる移動手段や道具ではなく「身体そのもの」であり、生活の質（QOL）に直結する。しかし、強い緊張や側弯の進行などによる急速な体型変化に対し、補装具支給制度における公費申請から納品までには数か月から1年以上を要するタイムラグが存在し、納品時にはすぐに合わなくなるということもある。さらにリハビリテーション（以下リハビリ）職が求める「姿勢の良さ」と現場の生活スタッフ（看護・療育）が求める「介助のしやすさ・ケアの円滑さ」との間で多職種間の意見調整が難しいという運用上の課題も少なくない。

目的

本報告の目的は、車椅子の更新を迎えた重症者一事例を通して、リハビリの視点での車椅子座位時の課題分析と、生活スタッフが直面する日々のケアの場面での課題を融合させ、双方の課題を同時に解決できる車椅子を製作・導入するための方法の検証を行うことにある。

方法

対象は60代の脳性麻痺、てんかん、知的障害を呈する男性1名。大島の分類1、横地分類A1、ADL全介助の当施設入所者である。新規車椅子の製作にあたり、リハビリ視点による課題抽出と日常ケアの場面の課題抽出を口頭で行い、分析し、シーティングの対策を以下のように行った。①安楽かつ姿勢が崩れない範囲でリクライニング角度を起こす②股関節を適度に屈曲位で保持し、座面にポメル（大腿間の突起）を設置して前方への滑りを物理的に制動③体幹保持のため体幹左側にサポートパッドを配置。完成後、生活スタッフに使用感を口頭にて確認した。

結果

新規車椅子の導入により、骨盤が安定したことで臀部の前方滑りが解消され、体幹の左側屈も改善した。また骨盤の安定に伴いフットサポートからの足の飛び出しが消失した。日ごろ関わる生活スタッフからは「姿勢が崩れずに活動が行えた」「安定感がある」との評価を得て、頻回に行われていた座り直しの回数が減少した。加えて、移動時における壁や扉への足部の引っ掛かりが予防でき骨折のリスクが軽減した。

考察

重症児者の車椅子製作において、リハビリ職の理論だけで「正しい姿勢」を押し付けると、現場での移乗や医療ケア時の使いにくさを招き、結果として姿勢崩れを放置するという悪循環に陥りやすい。本事例において成果を得られた要因は、「なぜ姿勢が崩れるのか」という現象を評価した上で、生活スタッフの「頻回な座り直しが大変である」という日常の困りごとに焦点を当て、双方の課題を「骨盤の安定」という一つの軸に統合できた点にある。今回意見収集は口頭で行っているが、より多くの職員の意見の吸い上げ、車椅子作製を関係職員で共有する仕組みを構築するため、製作前に生活スタッフの意見を吸い上げる「意見収集シート」の運用を開始している。本シートをより有益に機能させ、製作前からの多職種連携を強固にすることが、利用者の身体的負担とスタッフの業務負担を同時に軽減する鍵であると考えらる。